

和声学教本

アンリ・レベール

フランス学士院会員
パリ音楽院作曲科教授

横山 真一郎 訳

訳者より

本書は、アンリ・レベール（1807-1880）の「和声学教本」（1862年）の日本語訳です。

2012年7月22日より翻訳を始めました（今初めて気付きましたが、今年はちょうど出版150周年に当たるんですね）。

とりあえず最初の練習課題のあたりから翻訳を初めており、そこまでは楽譜のみを掲載しておりますので、すぐに練習課題に取り掛かりたい方は、21ページからご覧下さい。

ゆっくりと少しずつ翻訳して行きますので、気長にお付き合い下さいませ（3年ぐらいかかるんじゃないかと思えます）。

原文はインターネットで見ることができます。

http://imslp.org/wiki/Trait%C3%A9_d%27harmonie_%28Reber,_Napoli%C3%A9on_Henri%29

ただし上記のものは第9版で、私の持っているのは第4版ですので、多少の違いがあるかもしれませんが、まだチェックしておりません。

レベールについてはこちらなどを（英語です）。

http://en.wikipedia.org/wiki/Napoli%C3%A9on_Henri_Reber

横山 真一郎

帝国音楽院

レベール氏の和声学教本に関する 音楽院・音楽教育委員会の報告

パリ、1862年4月26日

帝国音楽院・音楽教育委員会は、強い関心を持って、アンリ・レベール氏の和声学教本を検討してみた。

この著作は、巨匠達の確かな伝統の上に打ち立てられており、近代教育のすべての要求にかなうものである。これはよく計画され、よく書かれている。これに含まれる優れた規則は明確に表現され、教育課程に結び付けられ、優雅で正しい様式の漸進的な実例に基づいている。（←要改訳）

レベール氏の著作は大きく2部に分かれており、第1書では協和和音と不協和和音、およびそれらの用い方に関連するすべてのことを扱っている。転調を扱った章では新しく創意工夫に富んだ概要で満たされている。第2書においては、

建設中

署名、

オーベール
パリ音楽院院長
委員会会長

カラファ - アンブロワーズ・トマ - カストネル - ヴォト - ガレ -

Ch・ダンクラ - プリュミエ

Ed. モネ
帝国委員

原本と相違なきことを証す、

A. ド・ボーシェンヌ
秘書官

初めに

この教本は音楽学校での実践という特殊な観点と、楽曲分析（アナリゼ）という、より一般的な観点の双方から企画された。

著者は学校での教育においては、最大の純粋性を持って書くべきであるという制限を設けなければならない、と確信している。それ故著者はでき得る限り、一般に認められた伝統と法則、そしてその影響の下に、すべての巨匠たちによって形作られた様式を、尊重したのである。

しかしながら、**厳格様式**の規則のみに限られた和声学は、楽曲分析の観点からは不十分であり、もし生徒が巨匠の作品を学ぶならば、そこに彼が教わって来たことに反する大胆さや放縦さ、あるいはまた、誰も彼に教えなかったためにどうしても説明のつかない奇妙な連結を発見して驚き、生徒の心に疑問が生じることになるだろう。

和声の教育は従って、言葉の完全な意味において、生徒をして自身で全てを分析できるようにし、この古典的な学習を一旦終えた後は、躊躇や恐れなく自由様式と呼ばれるものを実践できるようにすることである。

そのことが、我々がこの著作に、この1世紀来優れた作曲家達がそれによって相次いで音楽芸術を豊かにして来た、より広い和声の素材をこの本に書き入れた理由である。（←要改訳）

建設中

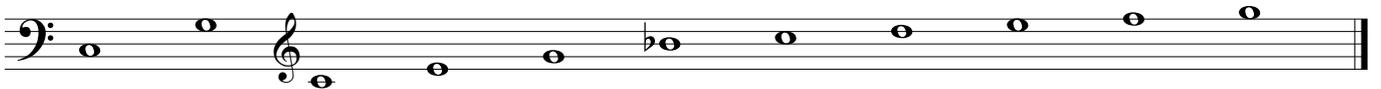
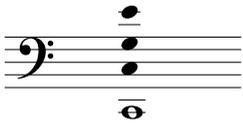
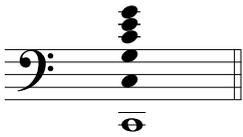
目次

建設中

緒論

弦および管の響きは異論無く、我々の音楽の物質的および素材的な根源である。何人かの理論家は誤って、後で証明するが、我々の和声及び旋律の体系はすべてそこから生じると主張した。そこで我々はここに、この和声的および旋律的な一定の組み合わせの拠り所となる音響現象の効果を簡潔に説明しようと思う。

ある低音、例えばチェロやピアノの低いドの音を鳴らした時、耳を近づけ注意深くその響きを聴いていると、低いドの音の他に、



建設中

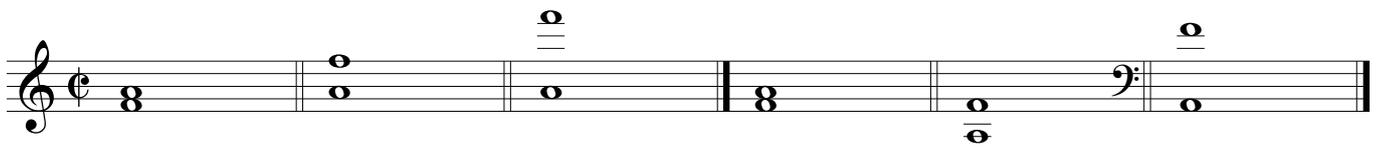
建設中

基礎知識

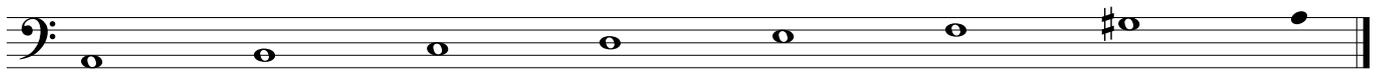
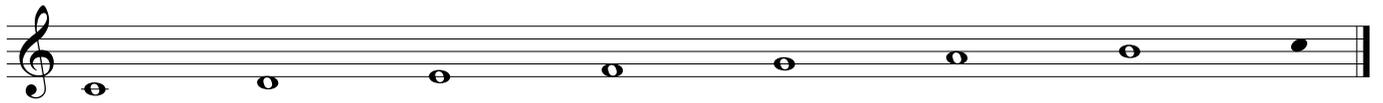
音程

The image displays six staves of musical notation in treble clef, illustrating various intervals. The first staff shows a whole note chord with a circled '8' below it, representing an octave. The second staff shows a whole note chord with a circled '2' below it, representing a second. The third staff shows a whole note chord with a circled '3' below it, representing a third. The fourth staff shows a whole note chord with a circled '4' below it, representing a fourth. The fifth staff shows a whole note chord with a circled '5' below it, representing a fifth. The sixth staff shows a whole note chord with a circled '6' below it, representing a sixth. The notation includes various accidentals (sharps, flats, naturals) and some notes are marked with an 'x' to indicate specific intervals.

建設中



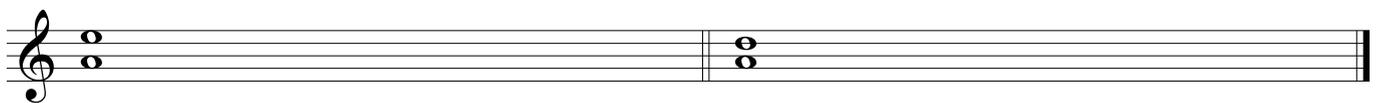
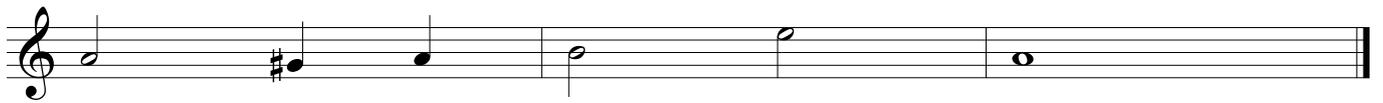
建設中



建設中



建設中

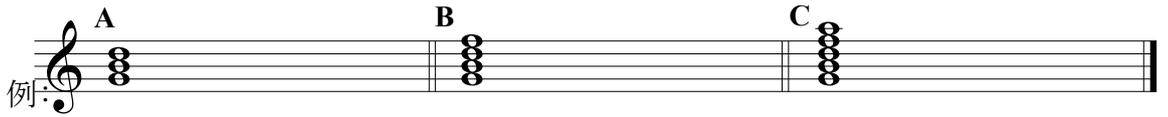


第1書

和音

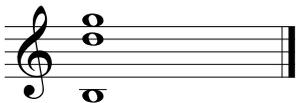
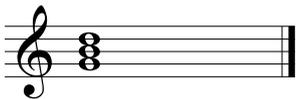
§ 11. 和音という語の一般的な意味は、複数の異なる音の同時的発音である。

§ 12. すべての和音の最も基本的な構成は、一つの同じの音階に属する3度の音程で積み重ねられた、3つ、4つ及び5つの異なる音の集まりである。



以上がすべての和声組織における和音の構成の法則である。

この3度の積み重ねによる配置の中で、最も低い音を和音の**根音**あるいは**基礎音**と呼ぶ。和音の他の構成音の名前は、この根音からの音程によって決められる。すなわち、譜例Cの和音は根音（ソ）の他に、第3度音（シ）、第5度音（レ）、第7度音（ファ）、第9度音（ラ）によって構成されている。



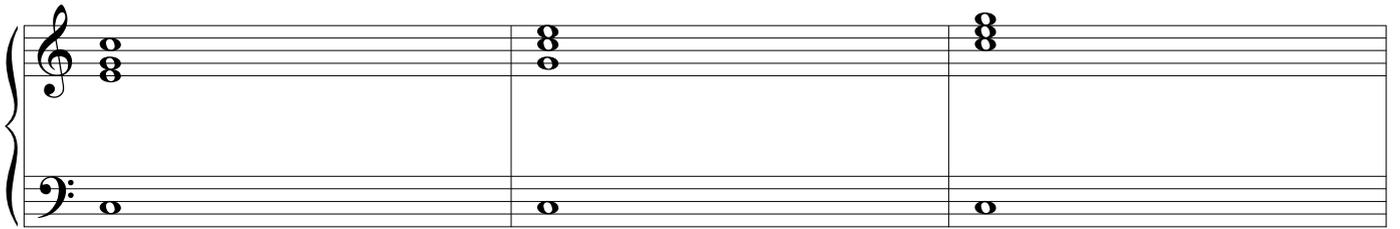
建設中

第1部

The image displays a musical score for the first part of a piece. It consists of two staves: a treble clef staff on top and a bass clef staff on the bottom. The treble staff contains seven measures of music, each with a single chord. The chords are: C major (C4, E4, G4), D minor (D4, F4, A3), E minor (E4, G4, B3), F major (F4, A4, C5), G major (G4, B4, D5), A minor (A4, C5, E5), and B minor (B4, D5, F5). The bass staff contains seven measures of music, each with a single chord. The chords are: C major (C3, E3, G3), D minor (D3, F3, A2), E minor (E3, G3, B2), F major (F3, A3, C4), G major (G3, B3, D4), A minor (A3, C4, E4), and B minor (B3, D4, F4). The second measure of the bass staff features a double bar line and a sharp sign (#) above the chord, indicating a key signature change to one sharp (F# major or D minor).

建設中

建設中



A musical score for piano accompaniment, consisting of three measures. The notation is written on a grand staff with a treble clef on the upper staff and a bass clef on the lower staff. The first measure shows a treble clef with a chord of three notes: C4, E4, and G4. The second measure shows a treble clef with a chord of three notes: C4, E4, and G4. The third measure shows a treble clef with a chord of two notes: C4 and E4, and a bass clef with a single note: C3.

建設中

Musical score for Soprano, Alto, Ténor, Basse, and Piano. The score is written in 3/4 time and consists of two systems. The first system shows the vocal parts and the piano accompaniment. The Soprano part starts on a whole note G4, followed by a half note A4, and then a quarter note B4. The Alto part starts on a whole note E4, followed by a half note F4, and then a quarter note G4. The Ténor part starts on a whole note C4, followed by a half note D4, and then a quarter note E4. The Basse part starts on a whole note G3, followed by a half note A3, and then a quarter note B3. The Piano part starts on a whole note G3, followed by a half note A3, and then a quarter note B3. The second system shows the vocal parts and the piano accompaniment. The Soprano part starts on a whole note C5, followed by a half note D5, and then a quarter note E5. The Alto part starts on a whole note A4, followed by a half note B4, and then a quarter note C5. The Ténor part starts on a whole note G4, followed by a half note A4, and then a quarter note B4. The Basse part starts on a whole note E4, followed by a half note F4, and then a quarter note G4. The Piano part starts on a whole note G4, followed by a half note A4, and then a quarter note B4.

Musical score for Soprano and Alto. The score is written in 3/4 time and consists of two systems. The first system shows the vocal parts. The Soprano part starts on a whole note G4, followed by a half note A4, and then a quarter note B4. The Alto part starts on a whole note E4, followed by a half note F4, and then a quarter note G4. The second system shows the vocal parts. The Soprano part starts on a whole note C5, followed by a half note D5, and then a quarter note E5. The Alto part starts on a whole note A4, followed by a half note B4, and then a quarter note C5.

建設中



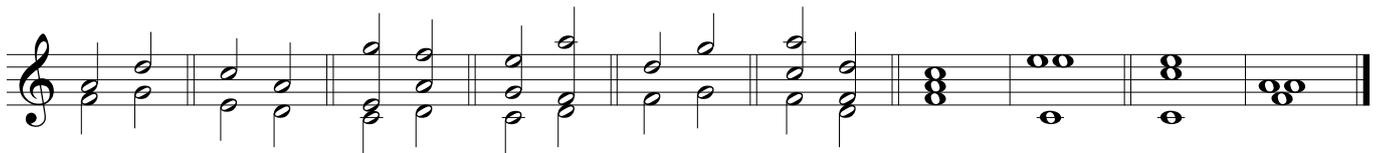
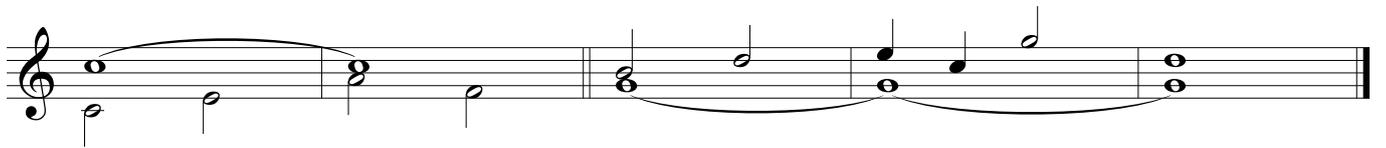
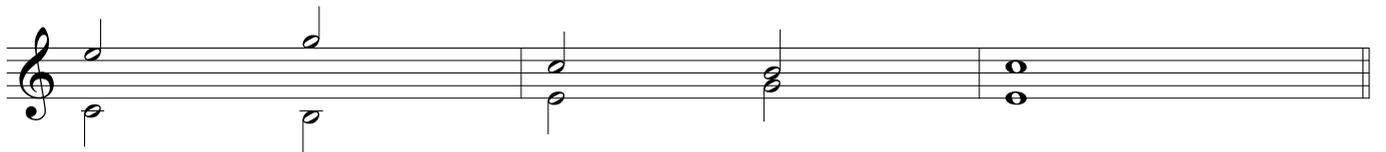
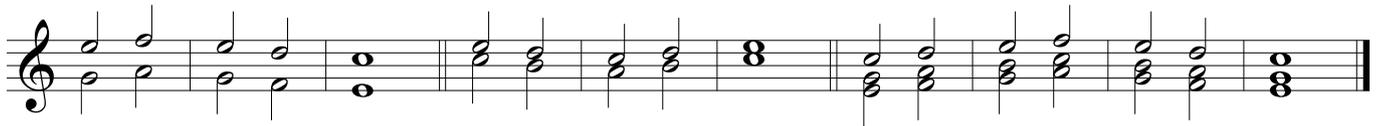
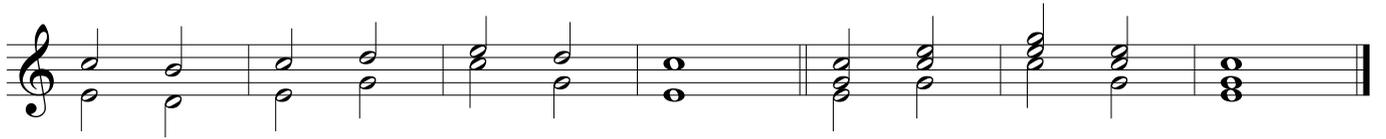
建設中



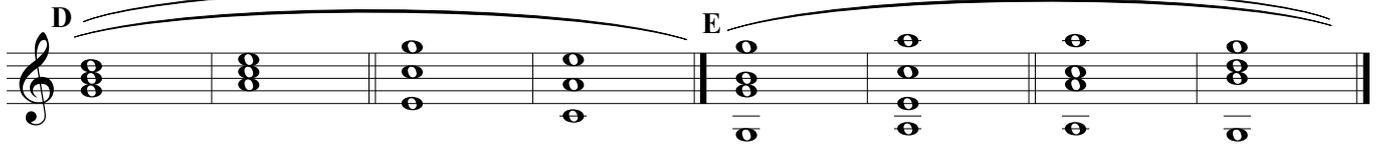
建設中



建設中



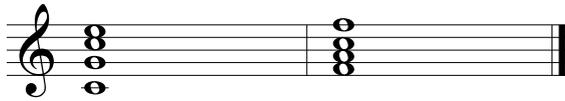
非常に悪い



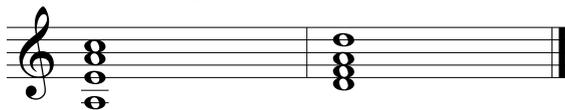
良い



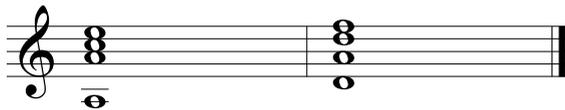
良い



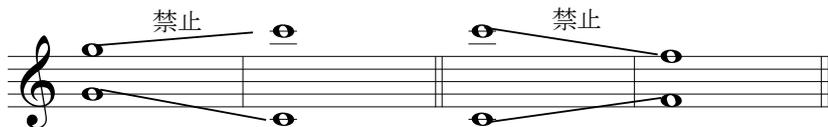
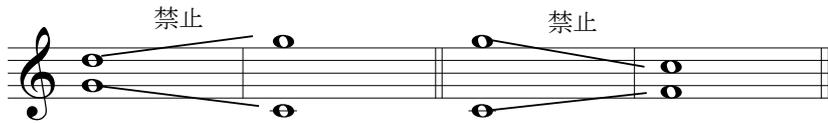
避けよ



良い



建設中



第2章のまとめ

- 狭すぎず、広すぎない和音配置を選ぶこと。
- なるべく和音の根音を重複させること。3度音の重複は実施の纯粹性がぜひとも求められる場合と、その3度音が調の良い音度 (I、IV、V) の場合にのみ行うこと。
- 1度 (同度、ユニゾン) の重複は決して行わないこと。(訳注、§ 53. の例外参照)
- 和音の中の1音を省略する場合、なるべく5度音を省略すること。決して3度音を省略してはならない。
- 各声部の旋律的な動きに関して、特に4声部の場合、できる限り近い音程に進行すること。
- 減音程、増音程、および短6度以上の旋律進行をしないこと。ただし8度 (オクターブ) は除く。
- 短調の場合、道音は必ずトニック (主音) に上行させること。
- 声部間の和声的關係において、直進行 (同じ方向への進行) させて完全5度及び完全8度に達してはならない。ただし2つの声部の内、上声部が順次進行し、下声部が跳躍進行して5度及び8度に達する場合は除かれる。さらに§ 54. の注意事項を確認すること。
- 連続する2つの完全5度および2つの完全8度は、反進行による場合でも固く禁じられる。

協和和音の実施に習熟するための練習課題

基本位置

§ 58. 根音がバスにある場合、和音の配置がどうであろうと、その和音は**基本位置**にある (§ 12.)。この章の終りにあるバス課題はすべて基本位置の和音だけでできている。従ってこれらのバス声部の音符はすべて和音の根音である。

学習者はこれらのバス課題を実施するに当って、それぞれの和音の**音度数**と、**種類**（長和音、短和音、減和音など）を確認しなければならない。次の例のように、和音の**音度数**と**種類**を各バス音の下と上に小さな数字で示すこと。

4声のバス課題の実施

種類 2 1 1 1 2 1 2 1 2 3 1 2
音度数 1 5 6 5 1 5 1 6 4 2 5 1

同じ課題の3声による実施

種類 2 1 1 1 2 1 2 1 2 3 1 2
音度数 1 5 6 5 1 5 1 6 4 2 5 1

注意事項 各課題の終りにおいて、最終和音は常に最上声部に根音を重複させることが望ましい。この忠告は、本書のすべてのバス課題において従うこと。

バス課題

注 いくつかのバス音の上に置かれた臨時記号は、それぞれの音の第3度音に作用する（上の例を見よ）。

4声と
3声で №1.

4声で №2.

4声で №3.

4声で №4.

4声で №5.

4声と
3声で №6.

4声で №7.

4声で №8.

訳注 この課題の著者による実施は、原著の217ページにある。

http://imslp.org/wiki/Trait%C3%A9_d%27harmonie_%28Reber,_Napol%C3%A9on_Henri%29

第3章

第1項

関係調における協和和音の機能について

§ 9. で調性について全般的に述べたことは、和音の実践に適用されるであろう。

§ 59. 長和音であろうと短和音であろうと、一つの完全和音を単独で聴いた時、耳はそれを即座にトニックの和音と捉える。しかしいくつかの異なる和音が続いた場合、音と音の関係が生じ、遅かれ早かれ調の感覚を引き起こす。しかしながらこのことは、耳がこの和音の連続によってもたらされたトニックの和音を捉えた場合にのみ完全なものとなる。

次の例で明らかになるだろう。

譜例Aにおいて、最初の和音はハ長調の印象を与えるだろう。それに続く複数の和音はこの調性感を破壊するどころか、確実にする。なぜならこれらの和音を構成する音は、すべてハ長調の音階に属するものだからである。

建設中

第2項

異なる音度の相対的な重要性について

§ 60. これ以降、**音度**という言葉で、その音度を根音とする和音を示すことにする。つまり、**音度**を示すということは和音の**根音**を示すということである。

§ 61. 一つの調を取り巻く一連の和音には、調性を曖昧、あるいは不満足なものにしないように、他のものよりもより頻繁に戻って来なければならない、特定の音度がある。
 最も用いられる音度は、第1度（トニック）と、第5度（ドミナント）で、この二つの和音のみによる和声の音楽が非常に多く存在する。
 この二つに更に第4度（サブドミナント）を組み合わせることにより、調性は完全なものとなる。なぜならこの三つの音度の和音は、音階のすべての音を含むからである。
 次のように配置してみれば確認できるだろう。

*) ドミナント トニック サブドミナント ドミナント トニック サブドミナント

この三つの音度は、長・短二つの旋法において最良の和音であるということで、**良い音度**、あるいは**第1位の音度**と呼ばれる。

建設中

*) 訳注: tonique, dominante, sous-dominante は従来それぞれ「主音」「属音」「下屬音」と訳されて来たが、これは誤訳で、本来なら「調音」「支配音」「下支配音」とでも訳すべきものである。しかし全くなじまないで、ここではそのまま（ただし sous-dominante は英語式に）呼ぶことにする。

建設中

